「情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティ形成・運営モデル事業」

長寿社会開発センター助成事業終了報告書

平成９年４月１０日

財団法人　長寿社会開発センター理事長　殿

事業の名称　情報ネットワークによる企業退職高齢者コミュニティ形成・運営モデル事業

団　体　名　財団法人　ダイヤ高齢社会研究財団　代表者名　理事長　鈴木精二
連絡先住所　東京都文京区本郷三丁目２８番８号
電話番号　　０３－５８０２－１６３１

１．事業内容の報告

１）事業の目的

本事業は、パソコン通信を媒体として形成される企業退職高齢者のコミュニティについて、情報交換を通じて運営するためのノウハウ獲得を目指した。

このため本事業は、平成７年に①コミュニティ参加者確保の方法、②パソコン通信操作技術の習得方法等、コミュニティ形成に係るノウハウ獲得を目的に展開を図った。平成８年は③コミュニティのモデル的運営により獲得される実践的データから、企業退職者の生き甲斐支援に有効な情報メニューの検討とともに、④企業退職高齢者のコミュニティ形成・運営について検討を通じてノウハウの獲得を目指した。

２）事業の実施体制

・事業実施主体

財団法人ダイヤ高齢社会研究財団が、事業実施主体として事業の統括及び以下の委員会の事務局を担当した。

・委員会

当財団が三菱グループ企業の退職高齢者及び６５歳以上の親と同居する社員で組織する高齢社会リサーチモニターの内、退職高齢者（全７６名）から本モデル事業への参画希望者を募り、２６名を本モデル事業参画者とした。

当該参画者は全員が委員として、コミュニティ形成・運営について概ね定期的な検討会を開催した。検討会の運営は事務局が担当した。

３）実施した事業の概要

①第一段階（平成７年１０月～１１月）

企業退職高齢者の中から、生き甲斐支援情報獲得に向けたパソコン通信活用

希望者を抽出した。

当財団が組織する高齢社会リサーチモニター（前述）を対象に、次の２つのステップを経て当事業への参画希望者を募った。

［第一段階作業ステップ］

ステップ１：パソコン体験セミナーの開催

ステップ２：本事業参画の呼びかけ

②第二段階（平成７年１２月～平成８年３月）

参画者に対してパソコン通信の操作技術を教育した。

参画者にパソコン通信活用の技術を習得してもらうため、次の３つのステップで教育を行った。なお、パソコン通信技術習得は、明生システムサービス株式会社が実施している「パソコン通信入門コース」講座を受講する形で実施した。

［第二段階作業ステップ］

ステップ１：パソコンの基本操作技術習得・・・・・・・・・・・１ケ月間

ステップ２：文章入力（ワープロソフトの操作）技術習得・・・２ケ月間

ステップ３：情報交換（パソコン通信ソフトの操作）技術習得・１ケ月間

③第三段階（平成８年３月）

参画者に限ってアクセス可能なパソコン通信ネットワークを開設。参画者同士のコミュニケーション手段として「電子メール」の運営を開始した。

④第四段階（平成８年４月～平成８年７月）

電子掲示板を通して、参画者同士がコミュニティを形成する上で関心のあるテーマについて検討する期間とした。しかし、第二段階の教育に掲示板への意見掲載技術習得メニューが含まれていないこともあり、以下のステップにより事業展開を図った。

［第四段階作業ステップ］

ステップ１：事務局でオペレーションマニュアル（テキスト）を独自に作成し、参画者各自が自宅で自習する形で教育を実施した。参画者の学習上の疑問については、電子メール、電話による随時質問受付の形で事務局が対応した。・・・１ケ月間

ステップ２：参画者から寄せられた掲示板への自由記載内容を集積し、集中するテーマの絞り込みをした。・・３ケ月間

⑤第五段階（平成８年８月～平成９年３月）

掲示板で絞り込んだ「テーマ」を基に、テーマ毎の会議室を開設し、各会議室で意見交換、及びコミュニティ形成の試みを展開した。ここでも、第二で行われた教育で使用した通信ソフトのバージョンと参画者の実際使用したソフトのバージョンが違っており、操作が分からないという声が多数でたため、以下

のステップにより事業展開を図った。

［第五段階作業ステップ］

ステップ１：事務局で実際使用している通信ソフトのバージョンにパソコン操作画面を合致させたオペレーションマニュアル（テキスト）を独自に作成し、参画者各自が自宅で自習する形で教育を実施した。マニュアルは、第四ステップの経験を活かしパソコンに習熟していない高齢者が自宅で独習できる表現を採用した。

ステップ２：掲示板で意見が活発にでた話題を９の会議室名としてジャンル分けした。他にパソコンどう活かす会、掲載技術練習コーナー、質問コーナーを設け、以下に示す計１３の会議室を開設した。参画者の自由意志で各会議室へ意見掲示とそれに対するコメント掲載を通して、コミュニティ形成を図った。

１）会議室名「旅行」

参画者が国内外を旅行した体験をもとに紀行文掲載が中心となった。このコーナーへの掲載は以下の会議室のどれよりも多くの掲載が見られ、もっとも活発なコーナーであった。

付記：紀行文作成は、参画者全員の関心が高く紀行文作家を招いて勉強会を開催した。

２）会議室名「歴史」

参画者の多くは戦争体験をしており、終戦前後の時期の体験談に自分の考えを盛り込んだ意見のやり取りや、明治から昭和初期に対する歴史観について意見交換が活発に行われた。

３）会議室名「イベント」

このコーナーには発言が無かった。

４）会議室名「ＯＢ会」

企業退職高齢者のコミュニティ形成を企業ＯＢ会単位で検討することの可能性について意見交換した。

５）会議室名「ボランティア」

参画者の属している「高齢社会リサーチモニター」会議で紹介された同モニターのボランティア活動報告に意見が寄せられた一件を除いては、有効な発言は無かった。

６）会議室名「介護」

参画者自身の介護体験報告とそれに対する感想の掲載が、第五段階期間中に５件あったが、それ以上の進展は見られなかった。一方で、当財団が実践研究している「在宅介護に関連した地域ケアのあり方研究」からの情報提供を求める意見があった。

7）会議室名「コンピュータ」

開設初期は、パソコン使用上の疑問点等について意見交換がされていたが、疑問点を文書表現を通して解決するには難しいとの見解から集会の提案があり、その後、パソコン自主研究会という形で、有志がパソコンを囲んで研究する集会に発展した。

付記：集会後、懇親会を開き、活気のある種々情報交換が行われた。

8）会議室名「親睦」

このコーナーの活用は、会議室での意見交換で親睦を図るということよりは、鉄道路線別沿線の会の開設・運営に係る相談や囲碁の会等趣味の会開催の可否打診等が主体であった。

付記：ここで検討された結果、参画者の居住地中心に３地域で沿線の会が発足した。また、囲碁の会が月１回の割で開催され、結果は掲示板へ報告される等パソコン通信ネットワークと集会のミックスの形でコミュニティが展開するようになった。

9）会議室名「井戸端会議」

他の会議室名には該当しないテーマを軽いタッチで意見交換することを狙いとしたコーナーである。祭日にあっては「日の丸の旗」に話題沸騰した。また、「野鳥のたのしみ」と題した話題は、参画者の中で野鳥に詳しい知識を持った人が中心となり一種の教室のごとき展開をした。

１０）会議室名「パソコンどう活かす会」

このコーナーを開設した当初の期待は、参画者に掲示板では言及しきれなかったコミュニティ形成について更に議論を重ねることであったが、早期の段階で参画者の一人の「電子会議室への意見掲載技術は難しい」との発言に端を発した形で、参画者のほぼ全員がパソコンについては初級者でもあり、パソコンそのものの使い方についての意見交換に終始した。

１１）会議室名「練習コーナー」

パソコン通信に不慣れな段階で、意見掲載を目的に開設してある会議室に直ちに意見を述べることは相当の抵抗があるという多くの参画者からの意見に従い、このコーナーを開設した。

１２）会議室名「小さな疑問・大きな疑問・・・誰か知ってる会」

ある一人の参画者から事務局に寄せられたパソコン使用上の質問に対し、事務局担当者が質問者に電子メールで回答すると同時に、参画者全員に参考となるものを質問者名は伏せた形で質疑応答形式で掲載するコーナーである。